

ヨハネによる福音書18章12-40節 「三つの裁判」

1A 宗教裁判 12-27

1B カヤパの舅アンナス 12-14

2B 中庭での火暖まり 15-18

3B 不正な裁判 19-24

4B 三度の否定 25-27

2A 世の裁判 28-40

1B ローマによる死刑 28-32

2B 世のものではない国 33-38a

3B バラバの釈放 38b-40

本文

ヨハネによる福音書 18 章 12 節から見ていきます。午前礼拝にて、イエス様を捕える者たちが、ゲッセマネの園にやってきたところを見ました。そこにあるのは、イエス様の弟子たちへの気遣いでした。「18:8 わたしを捜しているのなら、この人たちは去らせなさい。」と指示をし、弟子たちを守られたのです。けれども、ペテロは違いました。イエス様と死ぬまで一緒すると言っていました。剣をもって大祭司のしもべの耳を切り落としてしまったのです。しかし、イエス様はご自分の体を罪のいけにえとしてささげるため、命をご自分で捨てるために、今、この時が来たのです。主の御心の中にいて、その愛に留まることが、いかに大切かを知りました。

そして、ペテロのように、主のために生きようとしながら、実は肉の行いの中に入ってしまったことを見ました。私たちは後半で、そのペテロがとてつもない過ちをイエス様に対して行ってしまうところを見ていきます。ペテロもまた、十字架を通しての罪の赦しと、イエス様の憐れみと愛があって、初めてこの方に付いていけるのだということを知ることになります。十字架の前にいることから、私たちは成長することはできないのです。

1A 宗教裁判 12-27

1B カヤパの舅アンナス 12-14

12 一隊の兵士と千人隊長、それにユダヤ人の下役たちは、イエスを捕らえて縛り、13 まずアンナスのところに連れて行った。彼が、その年の大祭司であったカヤパのしゅうとだったからである。

「一隊の兵士」とは、約 600 人のローマ軍の単位のことですが、それを統括していたのが「千人隊長」だったということです。そして、ユダヤ人の宗教指導者らの下役たちが、イエス様を捕えます。午前でお話したことを思い出してください、イエス様の前で彼らは倒れたほどで、そういった武力

が主の前で無力であり、主がご自身の意志で捕らえられなければ、そうなりません。イエス様を縛っていたのは、その縄ではなく、父の御心に従うことに捕らえられていました。

連れていかれたところは、大祭司アンナスのところ。これが他の福音書に書いていないことで、ヨハネはその空白の部分埋めるようにして、カヤパの前にイエス様はアンナスのところに連れていかれたことを書いています。アンナスの名は、ルカの福音書 3 章に、バプテスマのヨハネが宣教活動をした時に、彼とカヤパが大祭司であったことが書かれており、また使徒の働きで、ペテロとヨハネが捕らえられて、議会(サンヘドリン)に出てきた人々に、「4:6 大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレクサンドロスと、大祭司の一族もみな出席した。」ということです。

大祭司がなぜ二人もいるのか、それを知る鍵は、「その年の大祭司であったカヤパ」というところ。大祭司は、終身の務めです。死ぬまで大祭司です。彼は紀元後 7 年から 14 年まで祭司でしたが、ローマがその影響力の強さを嫌がりました。ピラトの前任の総督ヴァレリウス・グラトゥスが罷免したのです。その後、アンナスの息子 5 人、また義理の息子が、ローマによってとっかえひっかえ、大祭司に任命されました。そのため、ユダヤ人たちの間ではアンナスが未だ、大祭司とみなしていた人たちが多かったのです。

このアンナスと一家が、神殿の境内の管理をしていました。パリサイ人は、その中庭を「アンナスの息子たちのバザール(市場)」と呼んでいたそうです。イエス様が宮清めによって、その貪りを非難されたことを、根に持っていたかもしれません。

ところで、この審問、次のカヤパの裁判も、すべて彼らの掟に違反していました。彼らの口伝律法、ミシュナには、どのように裁判を行うかの規定があります。そこに、朝のいけにえの前に裁判をすることを禁じていました。ところが、彼らは急いで決着をつけようとしています。それで、自分たちの掟に違反することを行っているのです。自分が正しいと思ってやっても、義なるイエス様に反抗しているならば、不義に手を染めなければいけないことが明らかです。

14 カヤパは、一人の人が民に代わって死ぬほうが得策である、とユダヤ人に助言した人である。

ヨハネは、しっかりとカヤパが、この政治的判断をした張本人であることを記しています。覚えているでしょうか、ラザロをイエス様が生き返らせたことによって、彼らは最高法院、すなわちサンヘドロンを召集しました。そこで、こう議論していました。「11:47 われわれは何をしているのか。あの者が多くのしるしを行っているというのに。48 あの者をそのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまおう。」これが、ユダヤ人指導者たちの恐れだったのです。ローマは、多神教を信じ、皇帝を神として祭り上げている国です。一神教のユダヤ人は弾圧されて不思議ではありません。けれど

も、これまでの長い歴史的な経緯で、自分たちの宗教と自治は許されていたのです。しかし、ここでイエスを祭り上げるメシア運動が起こったら、せっかく築き上げたユダヤ社会が壊されてしまう、と恐れたのです。これは、自分たちの地位が危ぶまれると言っているのに等しいでしょう。

続けて読むと、こうあります。「11:49 しかし、彼らのうちの一人で、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは何も分かっていない。50 一人の人が民に代わって死んで、国民全体が減びないですむほうが、自分たちにとって得策だということを、考えてもいない。」カヤパが、イエスを殺そうと助言したのです。一人が死ぬのと、国民全体が死ぬのとどちらがいいのか？という政治的判断です。これもまた、自分の地位が保つためという動機も働いていることは、言うまでもないでしょう。皮肉なことに、彼らはこのようにして自分たちを救おうとしたから、この40年後、むしろ彼らサドカイ派は滅んでしまったのです。ユダヤ人はイエスをメシアとして信じない世代となり、その中でユダヤ反乱をローマに対して起こして、それで70年にエルサレムが破壊されたのです。サドカイ人はまさか、ローマが自分たちの家や土地を滅ぼすとは思っていませんでした。けれども、ユダヤ人の抵抗があまりにも激しいので、ローマは厳しく対処したのです。イエス様が、「マルコ 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」と言われたとおりです。

ところが、使徒ヨハネは、興味深い注釈を残しています。先ほどの11章の箇所には続きです、「11:51 このことは、彼が自分から言ったのではなかった。彼はその年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、52 また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子らを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。」カヤパが優れているからではなく、彼が時の大祭司として立てられていたから、だから神はそれを預言として発言させたということです。これが神のなさることですね、神はその器がどのような品性の持主であれ、ご自身が立てた器をご自分の為のために用いられるのです。

2B 中庭での火暖まり 15-18

15 シモン・ペテロともう一人の弟子はイエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の家の中庭に入ったが、16 ペテロは外で門のところ立っていた。それで、大祭司の知り合いだったもう一人の弟子が出て来て、門番の女に話し、ペテロを中に入れた。

ここの「もう一人の弟子」とは、ヨハネのことです。そしてヨハネは、なんと「大祭司の知り合いだった」とあります。ヨハネは、ゼベダイの子でした。漁師だからといって、小作人のような人たちではなく、大きな事業を展開させていた可能性があります。マルコ 1章 20節に、ヨハネと兄弟ヤコブが、「父ゼベダイを雇い人たちとともに舟に残して、イエスの後について行った。」とあります。ヨセフスでしょうか、当時の文献によりますと、乾燥した魚は当時、嗜好品としてよく食されており、アン

ナスの一家にも売っていたという話があるそうです。それで、ヨハネはそのままアンナスの家に入ることができました。そして、ペテロも門番の女中に対して、入れてもらったのです。

17 すると、門番をしていた召使いの女がペテロに、「あなたも、あの人の弟子ではないでしょうね」と言った。ペテロは「違う」と言った。18 しもべたちや下役たちは、寒かったので炭火を起こし、立って暖まっていた。ペテロも彼らと一緒に立って暖まっていた。

イエス様が予告されたとおり、ペテロが、イエス様を知らないと言う、一回目が来ました。今、ペテロは、大祭司の中庭にいます。けれども、他の福音書では、カヤパの前での裁判で、火にあたっていたペテロが、イエスと一緒にだつたと問われて、それを否定した話になっています。これは、「中庭」というのに、答えの鍵があります。中庭は文字通り、中にある庭で、その周りに部屋が並んでいます。アンナスとカヤパが同じ中庭を共有していて、違う家に住んでいるということは十分にあり得ることです。ですから、他の福音書ではカヤパの前の裁判しか書き記していないので、カヤパの裁判の時のことと勘違いしてしまいがちです。実は、一度目の否定は、アンナスの前での裁判の時に起こりました。

ペテロが、先に剣をもって、大祭司のしもべに打ちかかりましたが、今は門番をしていた召使いの女に言われて、この有様であります。そもそも、ローマ兵ではなく、大祭司のしもべに打ちかかったところで、自分でも戦える人を選んだのでしょうが、そこからすでにペテロが肉に頼っている姿を伺えます。信仰者が、肉に頼ったら、これほど惨めで弱い存在はないということです。私たちは、主に愛され、主に選ばれた者たちであり、主の守りの中に隠れているからこそ、強くなれます。弱い時に強いのです、といったパウロの言葉の通りです。しかし、自分たちにはこれがない、あれがないとして、世の真似をし始めると、自分たちがいかに惨めな存在かがすぐに明らかになります。

「ペテロも彼らと一緒に立って暖まっていた」とあります。時は春、4月の初頭辺りです。イスラエルでも夜は寒いですが、けれども、イエス様に敵対している人々と一緒に暖まっていました。ここにすでにペテロが、さまよってしまっていることが分かります。しかも、彼には、イエスに最後までついて行くという思いの中でこのことをやっているの、自分がさまよっていることに気づいていません。肉の力でイエス様のために生きようとしても、結局は、イエス様に反対するように動いて行ってしまうのです。主は、彼らのことを気遣って、捕らえられる前に弟子たちは捕まえないように、去らせたのにもかかわらず、こうやってイエス様のためにということで居残ったのです。自分の知恵、自分の判断に頼ることが、いかに虚しいことであるかを私たちは知らないといけません。

3B 不正な裁判 19-24

19 大祭司はイエスに、弟子たちのことや教えについて尋問した。

大祭司がイエスに尋問していますが、これ自体が彼らの規定に違反しています。被告人は、自分に不利な証言をしなくてよいのです。また、裁き司が尋問してはいけません。他に告発する者がいて、証人をその人がそろえて告発するのです。大祭司は警察の取調官ではないのですから、そういうことはしてはいけなるとされていましたが、今、見事にそれを行っています。

ここで大事なのは、「弟子たちのことや教え」についての尋問でした。弟子たちがここで、誰であるかを知られて、彼らに危害が及ぶかもしれません。そして教えについては、異端であるとされたら、彼らは共同体から追放される恐れがあります。

20 イエスは彼に答えられた。「わたしは世に対して公然と話しました。いつでも、ユダヤ人がみな集まる会堂や宮で教えました。何も隠れて話してはいません。21 なぜ、わたしに尋ねるのですか。わたしが人々に何を話したかは、それを聞いた人たちに尋ねなさい。その人たちなら、わたしが話したことを知っています。」

イエス様は、世に対して、まだご自分を、そして神を知らないユダヤ人たちに対して、公然と話されました。私たちはその記録を、ヨハネや他の弟子たちから福音書の中で聞いています。会堂、シナゴークや神殿の敷地で語っておられました。それに基づいて、その証人を連れて来ればよいのであり、なぜわたしに尋ねるのか、と逆に尋問しておられます。弟子たちには、まるで何か秘密結社のようにして、別のことを教えていて、それが異端の教え、危険な教えを垂れていたのではないかという疑いをかけていたのですが、イエス様は、その公然と教えたその中に、教えがあり、聞いた人たちも何人もいる、としておられます。

ここで、大祭司が尋問していたのが、イエス様が逆に尋問しておられるのが興味深いです。カモ権威もイエス様の中にあります。先ほどは武装して捕まえに来たけれども、イエス様は恐れさせ、倒れさせました。ここでは、尋問している者が尋問を受けるようにされました。イエス様が主導しておられます。

22 イエスがこう言われたとき、そばに立っていた下役の一人が、「大祭司にそのような答え方をするのか」と言って、平手でイエスを打った。23 イエスは彼に答えられた。「わたしの言ったことが悪いのなら、悪いという証拠を示しなさい。正しいのなら、なぜ、わたしを打つのですか。」

ここでも、違法な行為をしています。ユダヤ人の規定では、被告人を叩くことは違法としています。下役が根拠にしたのは、大祭司に対する答え方です。「神をののしってはならない。また、あなたの民の族長をのろってはならない。(出エ22:28)」という律法があります。パウロも後に、大祭司の前に立って、自分を叩くように命じたので、彼に対して、律法によって裁かれると宣言しましたが、彼が大祭司であると知らないでいた、と陳謝しています。ここ、呪ってはならないという律法があ

るからです。けれども、イエス様はアンナスが何の証拠も出さずに、尋問することが間違っているというのが、どこが間違っているのか？正しいのなら、どうして打つのか？と、ここでも逆に尋問しておられます。

しかし、この中で預言が成就していています。「イザ 50:6 打つ者に背中を任せ、ひげを抜く者に頬を任せ、侮辱されても、唾をかけられても、顔を隠さなかった。」イエス様はカヤパの審問において、ご自身がキリストであることを公言してはばからなかったのも、カヤパがこれが神への冒瀆であると断じ、人々がイエス様を殴るに任せたのです。

24 アンナスは、イエスを縛ったまま大祭司カヤパのところに送った。

アンナスの尋問では、イエス様を有罪にする証拠は何も見つかりませんでした。それでカヤパのところに送ります。

4B 三度の否定 25-27

ヨハネの福音書では、カヤパの裁判の中身は書かれていません。ペテロが、この間にイエス様を知らない二度言うこと、合計、三回言うことを書き記しています。

25 さて、シモン・ペテロは立ったまま暖まっていた。すると、人々は彼に「あなたもあの人の弟子ではないだろうね」と言った。ペテロは否定して、「弟子ではない」と言った。26 大祭司のしもべの一人で、ペテロに耳を切り落とされた人の親類が言った。「あなたが園であの人と一緒にいるのを見たと思うが。」27 ペテロは再び否定した。すると、すぐに鶏が鳴いた。

ペテロは、立ったまま暖まっていました。何か起こったらその場を離れることができるようにするためでしょうか。それでも、気づいた人がいます。「あなたもあの人の弟子ではないだろうね」。先に、アンナスが弟子とその教えについて尋問していますが、その弟子がここにいるのでは？ということ。彼は、すかさず、「弟子ではない」と偽りました。自分はキリスト者なのに、キリストについていなければ、それ自体が偽りです。そして、そこから出す言葉は偽り、嘘をつくことになります。

けれども、ペテロはごまかせませんでした。大祭司のしもべの一人がそこにいたのです。そして、ペテロがそこにいたことを、剣一振りですべて切ってしまったのですから、彼の顔はバレています。ペテロは、もうここで泥沼です。自分が良かれと思ってやったことが、どんどんイエス様ご自身を否定することになるのです。自分で考えて、それで良かれと思っているという生活、これはイエスご自身を否むことにあります。

しかし、希望は、イエス様はこれらすべてのことをすべて知っておられるということです。自分が

イエス様を知っていると思っけていても、たかがしれています。しかし、イエス様には知られているのです。ここが慰めです。主はすでにペテロに、「13:38 まことに、まことに、あなたに言います。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」と言われました。そして、ルカによる福音書では、神に執り成しの祈りをささげて、信仰がなくならないようにしておられました。その上で、ペテロに付き合ってくださいましたのです。ペテロの一連の失態をすべて、イエス様はしりぬぐいをしてくださっていて、私たちの尻ぬぐいもしてくださっているのです。

復活された後に、イエス様は、三度、「あなたはわたしを愛していますか。(20章)」と尋ねられました。それはあたかも、ペテロが、イエス様を知らないと言った回数、その悔い改めと赦しの機会を与えられたかのようです。そして、その度に、「わたしの羊を飼いなさい」と言われて、ペテロに教会の群れを牧するように任じられたのです。キリスト者というのが、全く自分の功德によらず、イエス様の愛と憐れみによるものだということがよく分かりますね。全ての人々が罪を犯して、神の前で有罪とされているのだということを知って、それで初めて神の恵みが理解できるのです。まだ、ペテロのように自分の頑張りで何とかかなると思っているならば、十字架という、キリストの死のみならず、自分の死を通っていないのです。

2A 世の裁判 28-40

1B ローマによる死刑 28-32

28 さて、彼らはイエスをカヤパのもとから総督官邸に連れて行った。明け方のことであつた。彼らは、過越の食事が食べられるようにするため、汚れを避けようとして、官邸の中には入らなかった。

カヤパ邸から、総督官邸に移しています。ルカによる福音書によると、その前に明け方、まず神殿の敷地にあるサンヘドリンの最高法院に連れ出しています(22:66-71)。先ほど言ったように、朝のいけにえが捧げられないと、裁判はしていけないことになっていたからです。これは、もう出来レースで、形式上のものです。それから総督官邸に連れて行っています。ここで裁判は、アンナスとカヤパという宗教による裁判でしたが、次は世俗の裁判、世の裁判になります。これは、教会で大きな問題が起こって、それを一般の裁判所で裁いてもらうような状況です。

総督官邸は、神殿の敷地の北隣にあるアントニオ要塞だと思われていましたが、今は、かつてのヘロデの宮殿、西側にあり、今のヤッファ門のそばにある、ダビデの塔のところではないかと言われています。普段、総督は、ユダヤ属州の都、カイサリアにいますが、他の兵士たちと同じく、支配している民の大事な祭りなどの時は、治安のため、またその民を統治していることを見せるため、総督官邸にいて滞在しています。

ここで非常に偽善的なのは、「汚れを避けようとして」というところです。異邦人の家に入ることは、律法の儀式を守っていないのですから、ことごとく汚れているとされ、過越の食事が食べられなく

なってしまいます。一般の人々は夜に食事をしますが、祭司長たちは朝になってから用意されず。それが控えていたので、避けていました。イエス様を殺すこと、妬んでいることについて、その心については汚れが一杯であったのに、外側の儀式的清めには細心の注意を払っていたのです。「マタ 23:25 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、内側は強欲と放縦で満ちている。」内側を清めて初めて外側が清められます。

29 それで、ピラトは外に出て、彼らのところに来て言った。「この人に対して何を告発するのか。」
30 彼らは答えた。「この人が悪いことをしていなければ、あなたに引き渡したりはしません。」
31 そこで、ピラトは言った。「おまえたちがこの人を引き取り、自分たちの律法にしたがってさばくがよい。」ユダヤ人たちは言った。「私たちはだれも死刑にすることが許されていません。」

総督ピラトがここに出てきます。紀元 26-36 年に総督になっていました。彼は、他の箇所でも、ガリラヤ人のささげ物にガリラヤ人の血を混ぜたという訴えがあったほどで(ルカ 13:1)、残忍な人物でした。ユダヤ人を治めるのに、嫌悪感があったものと思われます。けれども、ローマの代官であり、ローマ法にも忠実でなければいけません。

ピラトの疑問は、当然のものです。世俗の裁判が、なぜ宗教に関わることを裁くのか？ということです。例えば、私たちキリスト教会がエホバの証人の人たちが異端であるとします。彼らの説いている教えによっては、救われないと断罪します。けれども、それをもってエホバの証人の人たちが牢屋に入るわけでもないし、罰金を支払うわけでもありません。なぜなら、世の裁判所では、そのようなことを判断する法律などないからです。だから、ピラトは、「自分たちの律法にしたがってさばくがよい。」と言いました。

けれども、ここでユダヤ側は、「私たちはだれも死刑にすることが許されていません。」と言っています。ここが大事な点です。ユダヤ人には、石打の刑という死刑が、律法の中で定められていました。ですから、ステパノを殺した時は石打の刑でしたが、ローマ当局は見ても見ぬふりをしていたと思われる。しかし、ローマは、ユダヤ人から死刑の権利を剥奪していたのです。紀元 6-7 年、ヘロデの息子アルケラオが罷免されて、その後ヘロデがユダヤ人を支配する王国は、ヘロデ・アンティパスとヘロデ・ピリポなどに分割されましたが、ユダヤ地方だけはユダヤ属州として、ローマが直轄で支配することにしました。その時の総督カポニウス(Caponius)が、サンヘドリンの権限を制限して、死刑を執行する権限も剥奪していたのです。

ユダヤ人の指導者たちは、族長ヤコブが預言したことを心にとめていました。「創世 49:10 王権はユダを離れず、王笏はその足の間を離れない。ついには彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う。」これはメシアの預言で、メシアが、王権の離れないうちに来られると解釈していました。そしてその王権の象徴は死刑をする権限であり、メシアが来られる前に王権が離れてしまったとして、粗

布を着て、灰をかぶって嘆いたそうです。しかし、彼らはすでにメシアが来ていたことに気づいていませんでした。イエス様がすでにお生まれになっていたのです。

それで、彼らはローマによってイエスを死刑にしなければいけないとしました。自分たちでは、イエスが自分を神の子キリストにしているという冒涜罪にしていますが、ローマ法でそんなことは裁けません。そこで、カイサルが王であるのに、自らをユダヤ人の王と言って反逆していると、反逆罪で訴えたのです。反逆罪は、十字架による死刑で罰せられます。

32 これは、イエスがどのような死に方を示して言われたことばが、成就するためであった。

これらの、込み入った死刑のやり方が、実は、すでに聖書に預言されていたことであるし、イエスご自身が前もってお語りになっていたことであったのです。イエス様がこう言われていましたね、「12:32 わたしが地上から上げられるとき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。」上げられるというのが、そこに該当します。「12:33 これは、ご自分がどのような死に方で死ぬことになるかを示して、言われたのである。」石打ちではなく、十字架に上げられることによって、それで死なれるのです。そして詩篇 22 篇を読めば、十字架でなければ説明できない描写が、詳しく書かれています。主なる神は、千年ぐらい前からこのようにして、メシアが十字架刑によって死ぬように前もって告げられ、それでイエス様は、ご自身が上げられることによって人々をご自分に引き寄せることを語られました。

2B 世のものではない国 33-38a

33 そこで、ピラトは再び総督官邸に入り、イエスを呼んで言った。「あなたはユダヤ人の王なのか。」

これが、彼らが訴えていることです。ユダヤ人の王だということです。イエス様にとって、これは、「はい」とも「いいえ」とも答えることができない質問でした。なぜなら、主はローマを、力をもって倒すために来られるような、王としては来られていないからです。主は再び来られる時に、諸国の軍隊と戦われて、オリーブ山に立たれて、エルサレムから世界を支配されますが、今は、人々の魂を十字架の犠牲によって、ご自分の元に引き寄せるところの王として来られています。

34 イエスは答えられた。「あなたは、そのことを自分で言っているのですか。それともわたしのことを、ほかの人々があなたに話したのですか。」

イエス様は、ピラトが尋問しているのに、かえってピラトに問い質しておられます。彼があたかも求道者であるかのように、自分でそう言っているのか、それとも他の人があなたにそう話したの

か？と。こうしたことが、伝道している時に起こりますね。イエスについて、直接、聖書を見て、それで聞いているのではなく、誰かがイエスについて書いているものを見て、それで意見を決めてしまっている人がいます。

35 ピラトは答えた。「私はユダヤ人なのか。あなたの同胞と祭司長たちが、あなたを私に引き渡したのだ。あなたは何をしたのか。」

ピラトにとって、イエス様がユダヤ人の王なのかどうか、全く関心はありません。同胞であるユダヤ人たちと祭司長たちがそう訴えているのだから、それに対して裁決をしなければならないのだ、ということです。だから、何をしたのかを尋ねています。イエス様はこの時点で、「わたしは、人々を癒し、悪霊を追い出し、良い知らせを伝えました。」など、バプテスマにヨハネに伝えられた、メシアとしての印を語ることはできました。けれども、相手は、聖書の知識も、また関心も全くない世俗の権威者です。そこで、次のように答えました。

36 イエスは答えられた。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」

ここが、イエス様の国と、世にある国とは大きく違うことを現しています。ピラトが考えているような、世の国のものではない。自分は王であるが、世のものではないと言われます。そして、この世のものであったら、ご自分の弟子たちがユダヤ人の手に渡さないように戦ったでしょう、と言われていています。ペテロがそれを独りで行おうとしましたが、全然だめで、イエス様がかえって敵の傷を癒されました。

ここに、私たちが属している神の国と、世の国との違いを大きく表しています。神殿の敷地で、「ルカ 20:25 カイサルのはカイサルに、神のものは神に返しなさい。」と言われましたね。彼らは、納税することが屈辱的に感じていて、それが神に背くのではないかと考えていました。けれども、彼らはそう言いながら、ローマの恩恵を受けて入るのです。その街路、すべてローマが整えています。治安もローマ兵がいます。そうした恩恵を受けて入るのに、そういった中でローマに従ってはいらない、として反権力的なことを言っていました。けれども、イエス様は、そういったことはカイサルに返しなさい。つまり、世俗の権威に対してはその義務を果たしなさいということなのです。権威に従うことと、神に仕えることは矛盾しないのです。

37 そこで、ピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのか。」イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたの言うとおりです。わたしは、真理について証しするために生まれ、そのために世に来ました。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」

ピラトは、ローマにとって何ら脅威になっていない、反逆罪には全く関係のない話だということが分かりました。それで「あなたは王なのか。」と尋ねています。イエス様は、確かに王として来られたのですが、それは真理を聞いて、真理に聞き従うところの御国なのです。イエス様が真理であり、イエス様の伝える神のことばが、真理です。その中で形成されていくのが、イエス様を王とする国であり、御霊によるものであり、イエス様に心から従う者たちによって広がっていきます。

38a ピラトはイエスに言った。「真理とは何なのか。」

イエス様が、真理という言葉を使って説明されました。真理は、当時のギリシア哲学がまだ色濃くあるローマ時代においても、語られていました。いや、語りつくされてきました。それで、ピラトが、「真理とは何なのか。」と言った時に、少し皮肉交じりに言ったのだと思われます。パウロがアテネに行った時に、エピクロス派やストア派がいて、パウロが彼らと議論していた話が出てきましたね（使徒 17 章）。アレオパゴスで、彼にも語る場が与えられ、「知られていない神に」について語りました。ピラトは、そういった哲学を聞いて、真理と言われるものを聞いて、落胆し、そんなものはない、と思っていたのかもしれませんが。ここで、目の前に真理であられる方がおられるのに、真理を知る機会を失ってしまいます。

3B バラバの釈放 38b-40

38b こう言ってから、再びユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私はあの人に何の罪も認めない。39 過越の祭りでは、だれか一人をおまえたたちのために釈放する慣わしがある。おまえたちは、ユダヤ人の王を釈放することを望むか。」

ピラトにとって、ローマ法に照らして、何の罪を認められないのは明らかでした。それでユダヤ人たちがそこから追い出せばよかったのです。「もう聞かない」とすればよかったのです。38 節と 39 節に大きな矛盾がありますね。イエス様は有罪ではないのです、無罪です。囚人にさえなっていない。なのに、どうやって釈放するのでしょうか？

彼も彼で、自分の政治生命を救おうとしてしまったのです。宗教指導者は、ユダヤ社会における自分たちの地位を失いたくないと思ってイエス様を殺そうと企んでいます。ピラトはピラトで、ユダヤ人をよく治めなければ、ローマに悪い噂が伝えられて、自分が罷免されるかもしれません。しかし、その自分を救いたいという思いが命取りになりました。後にピラトは、36 年に追放されたと言われています。彼は、この機に及んで、過越の祭りの囚人釈放の話を持ち出しました。ピラトにとって、これはユダヤ人に点数を稼げるチャンスでした。明らかに、反逆罪で十字架刑に処せられる人間、ユダヤ人たちにも危険な男、バラバではなく、何の罪も見いだせず、群衆もイエスを好んでいたのを知っているピラトは、言うまでもなくイエスを釈放することを望むだろうということです。

40 すると、彼らは再び大声をあげて、「その人ではなく、バラバを」と言った。バラバは強盗であった。

バラバは、暴動をしていました。反逆罪に問われ、またその中で強盗も働いていました。本来、彼こそが死ななければいけないのに、民はバラバを釈放するように選んだのです。私たちは、人間が、道徳的に、倫理的に正しい人がいるならば、その人を選ぶに違いないと思います。いいえ、人間がいかにもその場の雰囲気や感情に流されてしまうかがここに表れています。私たちの心が、何か良い模範を持ってそれに倣って生きられるのか？というのは、決してそうなりません。神が御子を死に渡すとお決めになり、この方の死によってのみ、初めて罪を取り除くことができるのです。罪とはこれしかないですね、聖霊が誤りを明らかにするとイエス様が言われましたが、「16:9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。」